

緑の快速で、逢いましょう

列車の停まる所だけどうにか雪掻きがされた小さな小さな停車場を降りると、私は真っ赤なミトンに手を包み、外套の襟を深く立てた父の温かな左手をしっかりと握って、ふんわりとした銀色の地面にゴム長の足跡を一つ、また一つとつけて行った。

見渡す限り一面音もなく降りしきる、雪、雪…。その白く霞む果てまで広がる灰色の巨大な鏡のような水面(みなも)。

「ほら、茉奈。あっちだよ！」いつもは笑みを絶やさぬ父が背筋をピンと伸ばし息を潜めて目を細める先に、霧か粉雪かはたまた霞か、淡く揺れる白と白と僅かな灰色の曖昧な濃淡の中に、微かにうごめく小さな何かを、私は初めて見出した。

ある者はふわりと広がり、またある者はさらりと横に動き、目を凝らすのも束の間、真っ白な空の片隅から一筋、すりガラス越しに見る真珠の輝きのような、真冬の陽の青白い光線が湖面を照らし、そこに数十数百の白鳥の群れが次々に首(こうべ)を挙げて今まさに朝(あした)の光差す真ん中へと湖面を滑走してくるのが見えたのだった。

クー！ある者が鳴き出す。クーー、クーー！！すると他の者も呼応して鳴き、氷のように冷たく、それでいて白玉のように甘やかな光の差す方へ、我先にと静かな湖面に同心円の紋理を作って飛び立つ。そして光の中にその十字架を横に倒したような黒々とした影が何十何百と舞い、一面の水面の上を右へ左へと揺らめいたのだ。私は思わず父の顔を見上げた。「ねえ、お父さん…おとうさん！！？」

あ、まただ。

遮光カーテンの隙間から漏れる真夏の朝陽が眩しい。外ではアブラゼミが暑苦しく合唱している。うだるような湿気の強い土曜の朝。時計を見ると早10時半。ベッドから横を見ると、会社から持って帰った資料が大きなA4のファイルに入ったまま投げ出してある。それは齢五十を回った上司にオフィス中に響き渡る声で頭ごなしに怒られた末に投げつけられたものだった。私、昨日何時に帰ったんだっけ…。カレンダーを見ると8月13日。おっとお盆ではないか！慌てて冷蔵庫をあさる。胡瓜はあるが茄子を切らしている。私はとっておき長くて立派な胡瓜と、茄子の代わりに真っ赤で可愛いパプリカを手にとった。

これでよし！

窓辺に並ぶ胡瓜の馬と真っ赤なパプリカの牛。



ふと夢の中の雪景色を思い出す。あれは、どこだったんだろうなあ…。

父と過ごした最後の冬だった。そして父と行った、最後の旅だった。父が闘病の末に逝った後、母は神奈川平塚の海に近い借家に移った。平塚に移った母は黒髪を黄色く染め、メイクも濃くなり、そんな母の周りにはいつも怪しげな男の影が付きまとうようになった。父といった頃の穏やかで静かな母、平塚に移ってからの荒れた母。どちらが本性的なのだろう。私はそんな母を嫌悪した。苦勞の末に大学を出て社会人も5年目、今東京の片隅で一人暮らしを続ける私にとって、落ち込むときまって夢に出て来るのは父と見たあの一面純真無垢の雪景色と白鳥の群れなのである。

どこだったんだろう…。

地図帳を手にとって東北地方、雪国の方をぱらぱらとめくってみる。小さな停車場から雪原を歩いて行った先にある一面の水面。白鳥の飛来地…。白鳥といえば秋田の大潟村が有名だが、十にもならぬ私を連れた父がそんなに遠くまで行ったとも思えぬ。父と母と暮らしていた頃、私たちは奥武線北領家駅近くの静かな住宅街に住んでいた。そこから列車で子供を連れて行けるといって、奥武線の沿線だろうか。日本地図で奥武線の線路に沿って目を走らせるうち、私の目は一点で停止した。

館月形…かすかに聞いたことのある名前！

思い立ったが吉日、次の日私はその館月形とやらを訪ねてみることにした。6時半に中野の家を出て奥武線の新宿駅へ。ずらりと並ぶ改札機を通れば旅人を圧倒する特急、快速ホームと急行ホームの列。改札脇の「ホリーホックキュービック」で駅弁を買って優等列車ホームで軽く震えている草色のディーゼルカーに乗り込み、先頭車の簡易リクライニングの座席をボックス型に回して深々と腰掛けた。

鉄道好きだった父からの遺伝だろうか、私は小学校中学年頃には時刻表を読んで旅程を立てるのに慣れていて、驚いたことに目的地の館月形に停車する郡若線浜路行き普通列車は11時51分の次が16時03分までないという。ではその11時51分館月形着の喜多方発浜路行き830D列車に乗るにはどうすれば良いかと言うと、新宿8時59分発白河行き特急から接続する白河11時12分の05D快速列車ではタッチの差で三代の乗り換えが間に合わないため、結局午前中に館月形に着くには7時19分新宿発の03D快速列車で三代まで行き三代で830D列車1本前の10時42分三代始発974D浜路行きに乗る他ないのだ。厄介なのはこの03D快速列車というのが他の多くの下り快速列車と違って白河で後続特急から接続を受けずに会津若松まで先行してしまうため、974D列車に間に合うように郡若線が分岐する三代まで行こうとすると新宿から三代まで特急ではなく全区間快速列車に乗らねばならないということ。都内からわざわざ郡若線内に行こうとする客などほとんどいないということなのだろう。

不満たらたらで乗った快速列車の車内がしかし妙に懐かしい。昭和の残り香が感じられるふかふかのモケットに腰を沈めると、早速先程買った米沢牛弁当を開いた。もはや猪苗代湖畔まで少々時間がかかろうともそんなのはどうでも良い。新宿から中山道線の密集区間を走って来た列車も、浦和を出て奥武本線に入ると車窓が落ち着いて来る。三室の先で見沼の低地を渡り、一気に青空が広がる。快速列車は途中染谷と鹿室で各駅停車を追い抜き、広がる青田を見ながらすでに郊外の趣が強い関宿に到着した。

「まもなく関宿、関宿…。この列車は後ろ6両を関宿駅で切り離します。関宿より先笠間、白河、会津若松方面ご利用

用のお客様は前の 6 両をご利用ください。」

関宿を出て 6 両編成の身軽な姿になった快速列車は利根川の大橋梁を越え入道雲が湧き上がる空の下を突っ走って行く。下総境駅では上りホームに新宿駅でもよく見るクリーム色の急行電車が停車していたがその下総境を出てすぐに奥武本線の新 700 系上り普通列車とすれ違う。草色の列車ばかりが走る中距離線区に入ったことに内心興奮しつつも、車窓にうねる稲穂の照り返しに目を奪われるうちに列車はさらに 2 回ほど上り普通列車とすれ違い、特急も停まる筑波山口の駅に滑り込んだ。

「こちら、よろしいですか？」白髪で姿勢の良い田舎紳士風の男性が帽子を軽く挙げ、回転されていたリクライニングシートのはす向かいに座った。隣りのホームで待避している下り普通列車から乗り換えて来た風であった。

「そちらさん、どちらまでいらっしゃるんですか？私はちょっと白河まででね。」

「あら、私は猪苗代湖の方までで、郡若線という支線に乗り換えるのに、この列車でないと午前中に着けないもので、でも白河まででしたら特急の方が便利ではないですか？」

「おやおやお若いのに鋭い！そう、奥武線の下りダイヤでは快速も特急も筑波山口で普通列車から接続を受けるんだ。私は向上野っていう駅から乗ったんだがそこからなら筑波山口から特急に乗っても良いだろうと思うだろう。しかしな、このキハ 4000 系列車は私の出世列車だし、思い出の車両なんだよ。」

「え？出世列車、ですか？」

「あれは昭和 47 年、高校を卒業したばかりの私は親戚の伝手で東京に職を得て、会津の田島から東京に出て来たんだよ。あ、そんな話をしたら歳が知れるけれどね！その年に颯爽と走り始めたのがこのキハ 4000 系でね。ほかあ思ったものさ。花の東京に出て一旗揚げるんだ、そこにはあらゆる幸せがあって、自分はその鄙びた町から出るんだ、二度と戻るものかってね。でもそれから五十年、この歳になったら逆に故郷の山も懐かしくなってねえ。時々こうして機会を見つけては、あの日に乗った気動車に揺られて北へ向かうのも一興かな、なんて思うものだよ。」

「会津は、雪も降りますでしょう？」

「雪も何も、お姉さん！」

マスク越しに口元こそ見えぬが、老紳士の目の奥に一瞬輝くものを私は逃さなかった。

「冬の会津と言ったら雪また雪…国も指定する特別豪雪地帯でありますから！」急に畏まった口調で背筋をピンと伸ばして声を張る老紳士がおかしい。老紳士も急におかしくなったようで目元を細めた。あ、優しい笑顔！茉奈はふとこの老紳士の仕草を気にしている自分を自覚した。

列車は筑波山の東麓を行く単線の線路を走っていた。途中 1 回だけ、どこかの信号場で普通列車を待避させてすれ違っていたようだったが、気が付くと列車は緑豊かな峠を越え、右へ左へとカーブを描きながら走っているのだった。

「まもなく、笠間、笠間。お乗り換えのご案内です。普通列車白河行きはお隣ホームから 8 時 42 分発、JR 水戸線は改札を出てお乗り換えになります。この列車は快速米沢行き、終点まで先の到着、この先芦野でも下り普通白河行きに接続いたします。」

「おやおや、もう笠間かね。ここから茂木、烏山あたりまでは奥武本線の一番景色が綺麗なところだよね。」

「え？そうなんですか？」

「ご存じない？特に茂木から烏山にかけては山の中を急カーブで走る区間だ。那珂川の流れに沿って走る区間はこの路線の見どころですよ。」

列車は複線になったりまた単線に戻ったりするカーブの多い区間を駆け抜けて行く。小貫で上り快速列車とすれ違い、次の飯逆川から複線区間になり、茂木の手前の木幡で再び単線へ。

「奥武本線で、初めて乗った…いや、その、物心ついてからは初めてだと思うのですが、結構自然が多いところを走っているんですね。」

「おや、奥武本線は初めてでしたかな？いやこれは失礼、てっきり以前にも乗られたことがあるのかと思ってね。」

茂木ではほとんど停車時間を取らずに発車。老紳士の言ったように茂木を出た列車は山肌に沿ったきついカーブを速度を落として進んでいく。左へ右へ、山に挟まれた軌道を行くと、隠れ里のように開けた平地に金色に輝く田んぼが広がった。そして真っ赤なトンボがそこかしこに群れて飛んでいる。

「ここは大分稲の色づきが早いんですね。関宿や下総境のあたりではまだ緑色でしたが。」

「ああそうだ、北へ向かう列車は季節を早取りするんだよ。」

小さなトンネルを抜けたところで集落を見下ろす小さなすれ違い駅に進入する。今では滅多に見られないはずの700系初期車による上り普通列車が待避していた。

「あまり普通列車とすれ違わなくなりましたね。この辺りは1時間に何本くらい走っているんですでしたっけ？」

「普通列車は大体1時間に1本くらいじゃないかな。日中は2時間ほど普通列車の間が空く時間もあるし、何しろあまり乗らない区間だからねえ。」

先程見たトンボの群れだろうか？真っ赤な集団が我々の列車を追うように北を目指して飛んでいる。こんもり緑の山の木々に、時折広がる金色の稲穂、そして真っ赤なトンボ。私はすっかりこの景色が気に入ってしまった。列車はいつの間にか緑色に染まる川の豊かな流れに身を任せ、これを崖上から見下ろすか細い単線をゆっくりと走っていた。そしてトンボたちの群れも一つ、また一つを数を減らしながら、真っ赤な十字架のようなその体を川面に映し、列車と戯れるがごとくある時は少し先に、そしてある時は少し後ろへと位置を変えながらついて来るのである。

下境を過ぎると再び視界が開け、列車は複線の立派な線路を、人が変わったようにスピードを上げて轟進し始めた。一面の黄色い絨毯、そして空高くわずかにたゆたう鱗雲。その天まで抜けるような青空に上司に怒られたことも、仕事で思い詰めていることも、そんなことは本当に些細なことに思えて来るのだった。

烏山、七合と列車はスピードを上げつつもこまめに停車して行く。そしてその間に特急、気動車の普通列車、快速列車と立て続けにすれ違った。

「この辺りは少々賑やかですね。列車本数も少しばかり多いのか、街が近いのかなという感じがします。」

「街が近い、というほどではないでしょうけれど、この先にある大田原市は栃木県北部では有数の都市ですよ。奥の細道の舞台にもなっていてねえ。」

「本当に何でもご存じなんですね。奥の細道って、松尾芭蕉でしたっけ？」

「そうそう、俳人ということで東北を旅したわけですけど、本当は仙台藩への内情視察のために送られた徳川政権

の密偵だったとかどうか、実際の所はどうなんでしょうね。」

老紳士は何か話を始めるとすぐ脱線しては話し続ける癖があった。しかしそんな時にふと見せる少年のような眼差しを、茉奈は愛らしいと思った。

「間もなく、七合、七合に到着です。お乗り換えのご案内です。大子線普通馬頭行きは…」

「おっと忘れていた！七合の3分停車じゃないか。お姉さん、ちょっとお待ちくださいね！」

七合駅に着くや否や、老紳士はそそくさと車内から出て行く。短い発車の笛とともに息を切らせて帰って来たかと思うと、両手に瓶のコーラを手に入っていた。

「良かったら1本、どうですか？」

「あら懐かしいです！今でも売っているんですね！！」

瓶コーラを見た私はまたふと父を思い出してしまった。父は鉄道好きでよく私を旅に連れ出してくれたが、特に行く先々で瓶のコーラを見つけると買ってくれたものだった。

「瓶のコーラ、お口に合いますか？」

「ええ、昔父が旅先でよく買ってくれて…」

「お父様はどんなお方？」

老紳士の質問に一瞬何でそんなことを？という気持ちも湧いたが、そんなことより父の思い出が口から出てきた。

「穏やかな優しい父でした。今から思えば、田舎から出て苦勞の末に四十を過ぎて授かった子供で、私が言うのも何ですが可愛かったのでしょう。大切にしてもらいました。私が十の時に亡くなったのですが、父との思い出は今でも自分だけの宝物です。」

「そうですか。親御さんも娘さんと別れるの、さぞ悲しかったでしょうねえ…。」そう言って窓の外に目を遣る老紳士の目についさっきの子供のような光は消え、遠い眼差しの先に刈り入れを終えた稲架が流れていた。

「あら、すっかり季節が廻って、稲の収穫もここでは終わっているんですね！」

大田原への支線が分岐する黒羽を過ぎ、列車は裸になった田を見ながらなおも北上を続けた。遠く左の車窓を見ると那須の山の上の方が赤く染まっている。もうこの辺りでは紅葉が始まっているのだろうか…。季節は緯度の違いでそこまで早く廻るものなのだろうか。

芦野で久々に先行する普通列車に接続。またも初期型700系である。

「あら、確かこの電車ってもうわずかしが残っていませんよね。先程もすれ違ったような…」

「残り3編成ですね。でも、列車って、会いたいと思うと、会えるものかもしれませんよ。」

老紳士の言葉には不思議な色がこもっていた。会いたいと思えば会える。レールで繋がっていますから、とでも言わんばかりの笑みを見せ、老紳士はいつの間にか空になったコーラの瓶を窓辺にそっと置いた。

「私の娘は小さい頃コーラ瓶のふたを集めるのが好きでね。これを洗って色紙を張って、首飾りなど作ったものです。妻は端で怪我をしたらどうするんだと、いつも目くじら立てていましたがね。」

「ああそれ、私もやっていました。子供って皆同じなんですか。」

いや、そうではない、という風に老紳士が首を横に振る。怒られるのかと思ったが次の刹那、また穏やかな笑みを戻した老紳士はぼつりと言った。

「今日は猪苗代湖まで何をしに行かれるのですか？」

「思い出の場所なんです。もう 20 年ほど行っていないのですが久しぶりに。」

「ほう…」

しばし考える風にした後、老紳士は赤く染まり行く山々を見ながら恥ずかし気に行った。

「もしお邪魔でなければなのですが、私もちょっと訪ねたいところがあるので、今日は予定を遅らせて館月形駅まで行ってみようかな」

「え！私もその館月形駅に行くんです！」

奥武本線、磐岩線、白田線…奥武 3 路線のジャンクションである白河駅の開けたホームではわずか 1 分しか停車せず、03D 快速列車は後も振り返らずに走り続けた。列車は真っ赤に染まる丘陵をぐいぐい登って行く。

「この景色は変わらないものですね…。あ、お姉さんは記憶にはないんですか。」

そういう老紳士は何かを言いたげに見えた。マスク越しに見る笑顔に、喜びとも悲しみとも言えない不思議な炎が宿るのを、私は肌で感じた。

岩代長沼を出ると列車は真っ暗なループトンネルに入り、落ち葉が埋め尽くす軌道を、林の奥深く暗闇に繋がるか細い鉄路を登って行った。勢至堂の交換駅を過ぎ、再びトンネルへ。長い長い暗闇に単調な車輪の音が響く。反響が大きくマスク越しに話すのもお互いの声が聞き取れないため、私たちは自然と寡黙になった。私は飲み終わったコーラ瓶の赤い蓋をそっと手に取り、窓辺に飾った。その真っ赤な金属片に映る天井の扇風機が、いつの間にか回転を止めているのに、私は今更のように気が付いた。

暗いトンネルの先を出ると、霧に包まれひんやりとした三代の駅。無言のまま老紳士と列車を乗り換え、赤い 2 両の気動車列車のこれまた同じボックスに腰掛けた。行先表示のサボには「浜路」とある。いかにも湖岸に向かって走る列車らしい行先ではないか。

峠を越え三代駅に着いてからも老紳士が押し黙っているのが気になったが、たまたま列車で同席しただけの他人である。ずっと話を続けることもない。でも…。

モノクロームのように枯れ果てた野を進むと、1 駅 2 駅過ぎた後に列車の先がいきなり明るくなった。思わず目がく

らむ。真っ白な光の中へ列車が進む。光、いや、真っ白い何か。そしてその中に黒々とした十字が無数にうごめいているのが見えた。

「まもなく、館月形、館月形。お降りの際にはどうぞお足もとにご注意ください。」

列車は音もなく真っ白なホームに停められた。老紳士とデッキで待つ。ドアエンジンのきしむ音に続き、ベコベコのプレスドアが開いた。そのバコン！という音が心なしか鈍い。

「え、これって…」

私はあわてて辺りを見回した。

見渡す限り、一面音もなく降りしきる粉雪。その白く霞む果てまで広がる灰色の巨大な鏡のような水面(みなも)。そこに数十数百の白鳥の群れが群れ飛んでいる。

「大きくなったなあ。」

優しい声のする方を振り向くもそこには老紳士も、そして今乗って来た赤いディーゼルカーも、ホームの形すら見えないのであった。

「え、もしかして…お父さんなの！！どこ！！？」

「おや、緑の快速で来て赤い普通列車で帰って言ったのは茉奈じゃないのかい。」

「何を言ってるの？全然分からないよ！」

飛び起きると、窓の外ではアブラゼミの暑苦しい合唱。ベッドの横には部長に投げつけられた資料の束。枕の横には奥武線時刻表。あ、そうだ、今日は土曜日の朝だった。館月形とかいう駅に行こうと時刻表を繰っていたんだっけ。え、もう12時！！？

パジャマを脱ぎ洗面に向かう私の背後、都会の片隅の雑居ビルに埋もれた小さなマンションの四角い窓辺に、いささかしおれた胡瓜の馬とパプリカの牛。そしてその脇にコーラ瓶の真っ赤な蓋が真夏の陽を照り返しているのに、私はまだ気付いていなかった。

